

計画 3	2件(6名)	2件(6名)
4	1件(1名)*	0件(0名)
5	3件(5名)	3件(5名)
6	4件(11名)	2件(11名)
7	5件(9名)	5件(9名)
8	3件(6名)	2件(2名)
9	6件(13名)	6件(13名)
10	6件(11名)	5件(10名)
11	2件(2名)	2件(2名)
12	4件(5名)	3件(4名)
13	3件(6名)	3件(6名)
14	5件(8名)	4件(7名)
15	3件(7名)	3件(7名)
16	2件(5名)	2件(5名)
自由	35件(67名)	28件(54名)

(*印は、自由研究として採択)

(3) 研究会

昭和59年度も普通規模の「研究会」と小規模の「ミニ研究会」を募集し、以下のものが採択・実施された。

A. 研究会

1. ニホンザルの種の実態と保存方法の研究
2. 霊長類およびヒトの歯の機能形態をめぐって
3. 霊長類の初期発達
4. 第14回ホミニゼーション研究会

B. ミニ研究会

1. 餌付けニホンザルの研究における問題のうち、個体数増加とそれに関連した捕獲に対する研究面からの対応について
2. 霊長類の聴覚と音声に関する研究
3. 脳とホルモン
4. プロテアーゼの生理機能と分子進化
5. マカクの調教過程研究をめぐって
6. ニホンザルの地域変異

2. 研究成果

A. 計画研究

課題 1

感応式強煙火システムによるニホンザルの耕地回避学習に関する地域間比較研究

泉山茂之(京大・霊長研)

愛知県における野生ニホンザル分布については、長谷部(1923)、岸田(1953)、竹下(1964)、川村・和泉(1974)、環境庁(1978)の調査報告がある。県北西部においてはすでに絶滅し、現在の分布は県東部の三河山地に限られている。

今回の調査では、各県事務所において情報を収集した後、猟師、農作業中の人々などに聞き込みによる調査を行い、実際現場において打上式煙火等による駆逐方法の指導も行った。

三河山地におけるニホンザルの棲息域は、西から本宮山地区、明神・宇連地区、大入・富山地区の3つのブロックが認められるが、川村・和泉による1974年当時から10年経た現在、それぞれ4.3倍、1.8倍、1.5倍に広がった。特に本宮山地区での拡大が著しく、その特徴は棲息域の中に空白地域があること、必ずしも毎年同じ耕地に出没しないことなど、面上というよりも線上の分布を示し、棲息域が定着していないことと言える。

これは1960年代からの拡大造林の進行で、棲息域のセンターが消失し、奥山ほど造林率が高くなり、サルは点々と残る広葉樹を迫って広範囲の遊動を行い、丘陵末端近く程多く残る広葉樹を利用する比率が高くなってきたためと考えられる。

サルの出没する所は、ほぼ全域で猿害が認められ、被害はほとんど全ての作物に及んでいる。明神・宇連、大入・富山地区においては、シイタケの被害が大きく、シイタケの専業農家では事態が深刻である。

三河地方においては、古くからイノシシによる獣害の歴史があり、水田の周囲には“ししがき”が残っている。サルに対してもガス鉄砲、笛ロケットなどはすでに行われている。またイヌ放飼により被害が消失した地区もある。北設、新城においては、被害農家と現地で打上式煙火、笛ロケットによる駆逐方法の指導を行った。

明神・宇連、大入・富山地区については、棲息域のセンターが完全に消失しておらず、感応式煙火法、電気柵などその場に応じた対策をとり、徹底的に耕地からの駆逐を行うことにより、サルと人間との共存は充分可能であると考えられる。